

## 資料室だより 85

♪ビクトリアのマニフィカトについて

スペインの作曲家はとりわけ聖母マリアへの崇敬を表す楽曲を多く残す傾向にありますが、ビクトリアもその例に洩れず、マニフィカトは創作活動のなかで重要な位置を示し、計画性をもって取り組んでいたことは明らかです。彼は8つのすべての旋法に対してその偶数節に作曲したものと奇数節に作曲したものをセットとして16曲のマニフィカトを作曲し、さらに、晩年になってすべての節をポリフォニーで歌うセッティングでさらに2曲作曲していますので、生涯を通して18曲のマニフィカトを作ったこととなります。

最初のマニフィカトは20代の若い頃、コレギウム・ゲルマニウムにいた時期の *Liber primus qui Missae, Psalmos, Magnificat ad Virginem...*(1576年、ヴェネツィア)です。このなかに第1旋法、第4旋法、第8旋法がそれぞれ2セットずつ所収されています。2セットというのは偶数節に作曲したもの(奇数節はグレゴリオ聖歌で歌う)と奇数節に作曲したものと2セットということ。そしてさらに5年後に *Cantica B.Virgine vulgo Magnificat quattuor vocibus...*(1581年、ローマ)のなかで残りの第2、第3、第5、第6、第7旋法にそれぞれ上記と同じ要領で奇数節、偶数節に作曲し、マニフィカトのすべての節をすべての旋法で作曲完結させました。これはビクトリアの性格を表わすことではないでしょうか。まるで作曲計画表があるかのようにマニフィカトの作曲にこだわっているのです。のみならず、スペインに帰国した1600年には *Missae, Magnificat, motecta, psalmi...*(1600年、マドリッド)の曲集において、グレゴリオ聖歌を交互にいれずすべての節を作曲したマニフィカトを第1旋法と第6旋法で作曲してさらなるこだわりを見せています。それまですべて4声で作曲してきましたが、ここにおいては8声、12声と増大し、オルガンによる伴奏が付されています。最後のレクイエムを除けば、彼が新作を含めた曲集を出版するのはこれが最後です。つまりビクトリアは20代の出発点から最晩年の到達点までマニフィカトに心を寄せ、かかわり続け、作曲活動の最後にマニフィカトのサイクルを完結させたと言えるでしょう。

しかしながら資料室には第一旋法のマニフィカトが1冊あるだけでしたので、このたび以下の3冊のマニフィカトを購入しました。すべてMAPA MUNDIのSpanish Church Musicのシリーズです。

\*Magnificat Quinti Toni

第5旋法によるマニフィカト。4声ですが、最後の小栄唱(Gloria Patri)だけは6声になります。

\*Magnificat Sexti Toni

第6旋法によるマニフィカト。12声で、晩年のコンチェルタント様式を示しています。

\*Magnificat Octavi Toni

第8旋法によるマニフィカト。やはり4声で、最後の小栄唱が6声になります。

杉本ゆり記